

アイデンティティと信頼感が 首尾一貫感覚の形成に及ぼす影響

The Effect of Ego-Identity and Trust on Sense of Coherence

銅直 優子*

Yuko Dobeta

本研究は、アイデンティティの基礎と確立の高低と信頼感が首尾一貫感覚（SOC）に与える影響について検討することを目的とし大学生を対象に調査を行った。アイデンティティの確立状態が高い者は SOC が高く、確立状態が低い者は SOC が低いことが明らかになり、SOC の有意味感が強い SOC と硬い SOC の判別要因となる可能性が示唆された。信頼感については、有意味感の形成に自分と他者への信頼との関連、把握可能感と処理可能感の形成には不信との関連が認められた。

キーワード：首尾一貫感覚（SOC）、アイデンティティ、信頼感

I. はじめに

日本の平均寿命は男女とも高いことはよく知られている。近年では単に寿命の長さだけではなく、健康で生きられる寿命、つまり健康寿命について意識されるようになってきた。平均寿命が長くなっていけば健康寿命と平均寿命の差が広がっていくことも懸念されている。生きていくには健康でありたいと多くの人はずそう考えるだろう。健康でいるために、疾病にかかる要因を避けたり、健康を維持する要因を積極的に取り入れたりとしている人も多い。現代社会はストレス社会といわれ、ストレスに上手に対処するためにストレスマネジメントに興味を持ち、ストレス対処力を身につけていきたいという思いを持っている人も多い。ストレス対処力の一つとして、首尾一貫感覚（Sense of Coherence: SOC）がある。これは、Antonovsky により提唱された概念であり、この能力の高い人は、ストレス状況においてもしなやかにその状況に対応することができ、最終的には健康を維持することができるといわれている¹⁾。SOC は、直面した出来事を自分にとって理解できるものとして認知する能力である把握可能感（comprehensibility）、直面した問題を自分の力あるいは他人の力を借りながらも対処することが出来ると感じられる能力である処理可能感（manageability）、そして、日々の直面した出来事が不幸なことであっても自分にとって意味のあることだと捉えることのできる能力である有意味感（meaningfulness）の 3 要素から構成されてい

*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

る。SOC 研究においては、SOC を3要素でとらえるよりも合計得点でとらえていくことが主流であるが、SOC を3要素でとらえていくことは、SOC を形成する際のアプローチに役立つため、3要素での検討は重要であると考えている。

SOC 研究の初期には、SOC が高い人は、精神健康状態が良いという報告が多く見られたが、近年では、SOC の形成要因や SOC を高めるための効果的な介入方法などの研究報告が増えてきている。SOC の形成には、乳幼児期が最も重要であるとされており、次いで思春期が重要だと考えられている。乳幼児期では、個人にとって最も重要な人物となる養育者との関係のあり方が強く関わっており、思春期では、帰属している社会階層の環境が強く関わっていると考えられている。社会的地位が高いと、自分で物事を決定し行動することができ、その結果を予期できる機会が多いため、その経験が SOC の形成につながるとされている。一貫性のある経験、バランスのとれた負荷の経験、結果形成の参加への経験が SOC を形成するのに重要な経験として考えられている。SOC は、信頼のおける周囲の人や環境に包まれて自分が生きている感覚とも考えられており²⁾、この感覚は、自分自身も含めた自分を取り巻く環境に対する信頼感であるといえる。このように考えると SOC すべての要素を育てていくためには、信頼感が基礎として関係している。この信頼感の形成にはいろいろな考え方があり、エリクソンの心理社会的発達もその一つである。

エリクソン³⁾は、誕生してから死を迎えるまでに8つの段階に分け心理社会的発達を提唱しており、第1段階の乳児期には、母もしくは母の代わりとなる人物との関わりの中で、基本的信頼感を獲得できるかどうかその後の成長に非常に重要な段階であるとしている。彼は、個人を取り巻く社会でどのような体験をし、どの様に関わっていくかのプロセスにおいて、社会と自己の葛藤を経験し、ある危機を体験し、その段階をうまく適応できるか否かが個人の自我形成に大きな役割を果たしていると考えた。この考えを基に、乳児期の段階にうまく適応できれば、基本的信頼感を獲得するが、適応できなかった場合は不信感を獲得するとしている。しかしながら、ここでいう獲得とは、いずれか一方を獲得することを意味しているわけではない。すでに述べたように、乳児期には、母もしくは母の代わりとなる人物との関わりがその個人に大きな影響を与えていく。この時期、生きていくためにはだれもがその人物からの世話を必要とし、全面的に依存せざるを得ない。この関りの中で自分の不快表現に対しその人物がいかに適切な対応をしてくれるかによって、自分の外界への信頼感が築かれる。また、当然ながら常に適切な対応をしてもらえない環境は不可能であり、その関わりの中で多くの適切ではない対応も体験されることになる。これらの体験を通じて、乳児期の信頼感の獲得には、基本的な信頼感覚が不信感を上回るバランスを保つことが重要である。この初期の段階は、我々が生きている世界、つまりは社会生活をどのように捉えていくかという基礎となるものであり、アイデンティティの核となるとも考えられている。我々は誕生後すぐには自己への意識、外界への意識と明確に分けて理解することができないが、自分の反応に外界が適切に反応してくれているかどうかについては、感覚的に快-不快レベルで理解し

ていると思われる。この外界からの反応体験を通じて、他者に対する安定した信頼感を形成し、それが自分自身への信頼につながる。大別すると、信頼感が向かう方向には、自分自身に対する信頼感と自分以外の他者に対する2方向がある。

エリクソンの心理社会的発達における第5段階は、青年期であり該当年齢を13歳から19歳と考えられていたが、近年では大学進学率が増え、社会人として責任を負ったり、経済的に自立する時期が昔と比べると遅くなってきていることから、大学を卒業する22歳ごろまでがその時期に該当すると広く認知されている。大学生は、青年期から成人期への移行時期と考えることができ、青年期後期もしくは成人期前期とされる。この時期の課題は適応がうまくいけばアイデンティティを確立することになり、うまくいかない場合はアイデンティティを拡散することになる。

多くの大学生の最終目標は就職であり、社会の中でもそのことを強く期待されている場合が多い。この目標に向かって、大学3年生の後半からは、職業決定をするために「自分とは何か?」「自分とはどのような人間であるのか?」などと自分探しに直面することとなる。この過程とともに自己のアイデンティティを形成していくと考えられている。しかし、この段階においてアイデンティティの基礎を形成するわけではなく、先述したように、乳児期における基本的信頼もしくは不信感の獲得段階でアイデンティティの核が形成され、青年期においてその再確立が進むとされている。そのような考えに従うと、誕生後の体験から我々はアイデンティティの基礎作りを開始し、青年期から成人期前期にアイデンティティを確立し、この確立を基に、その後一生をかけてアイデンティティの再確立を繰り返す。

アイデンティティの形成には信頼感の形成が関わっており、SOCの形成にも信頼感の形成が関わっていると考えるべきだろう。そこで、本研究では、SOCの形成にアイデンティティ確立状態と信頼感がどのように関連しているかを検討する。

研究1では、アイデンティティ確立期にある大学生を対象として、アイデンティティの確立状態がSOCの形成にどのように関連しているかを検討することを目的とする。また、アイデンティティの確立状態の把握には、青年期のアイデンティティを確立するにあたってその基礎となるアイデンティティの程度を把握でき、また青年期のアイデンティティの確立の程度が把握できる尺度を用いる。アイデンティティの基礎と確立の組合せでアイデンティティの確立状態を見ていく。基礎も確立も低ければ自他への信頼感が育っていないためSOCの形成を促進しにくいだろうし、基礎も確立も高い場合は、自他への信頼感が育っているためSOCの形成を促進していくと考えられる。また、基礎か確立の一方が低い状態であれば、自他への信頼感が安定していない状態であるためSOCの形成を妨げると考えられる。そこで、研究1の仮説は、以下の通りである。アイデンティティの基礎も確立も高い者は他の者よりも3要素全てにおいて得点が高いだろう。また、アイデンティティの基礎も確立も低い者は他の者よりも3要素全てにおいて得点が高いであろう。そして、アイデンティティの基礎が高く確立が低い者と基礎が低く確立が高い者の間には差が見

られないだろう。

次に、研究 2 では、信頼感の程度が SOC に与える影響を検討する。SOC は、自分と周囲の人々や環境を含めた自分の生活世界に対する信頼感であり、これは、信頼のおける他者の存在が大きいと考えられている。そこでの経験を通じて自分や他者への信頼感が形成され、その信頼感が SOC の形成に大きな影響を与えていると考えられる。そこで、研究 2 の仮説は、以下の通りである。自分への信頼感と他人への信頼感とは SOC の 3 要素全てにおいて正の影響を与えるだろう。特に他人への信頼感の影響が強いと推測される。

II. 研究 1：アイデンティティの確立と SOC の関連について

1. 方法

a. 調査対象者及び調査手続き

関西私立 A 大学心理学関連講座の男女大学生 409 名を対象とし、授業中に調査用紙を一斉配付し、その場で回収した。対象者のうち、調査協力に同意が得られ、本研究に必要な 2 種類の調査用紙に回答し不備がなかった 262 (男性 177 名、女性 85 名) 名を分析対象者とした。調査期間は、2012 年から 2016 年である。

b. 調査用紙

〔SOC スケール〕Antonovsky が作成した 13 項目を山崎らが日本語に翻訳したもの¹⁾を使用した。本調査用紙は 7 件法で回答するようになっており、1 点から 7 点 (逆転項目の場合は 7 点から 1 点) として得点化した。本調査用紙は、把握可能感、処理可能感と有意味感の 3 要素から構成されており、各要素の質問項目数と内容は次の通りである。把握可能感は、「あなたは不慣れた状況の中にいると感じ、どうすれば良いのか分からないと感ずることがありますか?」、「あなたは、本当なら感じたくないような感情をいだいてしまうことがありますか?」などの計 5 項目から構成されている。処理可能感は、「あなたはあてにしていた人につながりさせられたことがありますか? (逆転項目)」、「どんな強い人でさえ、時には“自分はダメな人間だ”と感ずることがあるものです。あなたは、これまで“自分はダメな人間だ”と感じたことはありますか? (逆転項目)」などの計 4 項目である。有意味感は、「あなたは自分の周りで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか? (逆転項目)」、「今まであなたの人生は・・・(回答: 1. 明確な目標や目的は全くなかった~7. とても明確な目標や目的があった)」などの計 4 項目である。3 要素の得点と、全項目の合計得点を算出した。

〔アイデンティティ尺度〕下山が作成した、アイデンティティの基礎とアイデンティティの確立の程度を測定する尺度⁴⁾を用いた。アイデンティティの基礎は、主として対人場面における不安や孤独感など情緒的安定性に関する内容で、発達早期の基本的信頼や自律性といったアイデン

ティティの基礎に関わるものである。項目内容は、「自分の中に常に漠然とした不安がある（逆転項目）」、「まわりの動きについていけずに自分だけ取り残されたと感じることもある（逆転項目）」などの計 10 項目である。アイデンティティの確立は、主として主体性、個性、社会性に関わる項目内容であり、「私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる」、「社会の中での自分の生きがいがかつてきた」などの計 10 項目である。回答方法は、「全くあてはならない（1点）」から「良くあてはまる（4点）」の 4 件法である。

2. 結果

以下の統計処理には、IBM SPSS Statistics 22 を使用した。

a. SOC とアイデンティティ尺度の相関関係

アイデンティティ尺度と SOC との関連を見るために相関関係を算出した。その結果が表 1 である。アイデンティティの基礎と SOC のすべてにおいて正の相関が認められた。つまり、アイデンティティの基礎の獲得の程度が高ければ SOC のどの要素においても得点が高いことが分かった。アイデンティティの確立では SOC の有意味感と SOC 合計得点との間に正の相関が認められた。また、有意味感とアイデンティティの基礎よりもアイデンティティの確立との相関係数の方が高かった。

表 1. SOC とアイデンティティの相関係数 (N=262)

	アイデンティティ	
	基礎	確立
	N=262	
有意味感	.442	.537
処理可能感	.526	.254
把握可能感	.570	.301
SOC合計	.663	.465

b. アイデンティティの確立状態と SOC の関連

アイデンティティの基礎とアイデンティティの確立の平均値を基準にし、それぞれ高群と低群に分けた。アイデンティティの基礎の平均値は 27.39、標準偏差は 4.57 であったので、平均値の 27 点の者は除外し 28 点以上を高群として、26 点以下を低群とした。アイデンティティの確立の平均値は 25.09、標準偏差は 5.70 であったので、同様に平均値の 25 点の者は除外し 26 点以上を高群とし、24 点以下は低群とした。その結果今後の分析の対象者数は 214 名となった。アイデンティティの基礎の高群と低群と、アイデンティティの確立の高群と低群の組合せで 4 群に分けた。基礎と確立が両方とも低い「低群」が 65 名、両方とも高い「高群」が 78 名、基礎が高く確立が低い「基礎高群」が 40 名、基礎が低く確立が高い「確立高群」が 31 名の 4 群である。

この 4 群で SOC の違いをみるために SOC の 3 要素得点と SOC の合計得点を従属変数として 1 要因の分散分析を行った。その結果すべてにおいて 1%水準で有意差が認められたため（有意味

感：F (3,210) =25.17, 処理可能感：F (3,210) =17.18, 把握可能感：F (3,210) =27.53, SOC 合計：F (3,210) =40.88, 全て $p<.01$ 、多重比較 (Bonferroni 法, 5%水準) を行った。4 群の SOC 得点の平均値、標準偏差と分散分析の結果は表 2 の通りである。

表 2. アイデンティティ郡ごとの SOC 得点の平均値、標準偏差と分散分析の結果

アイデンティティ群		低群	基礎高群	確立高群	高群	F 値	多重比較
N		65	40	31	78		
有意味感	平均値	13.52	17.13	16.52	18.85	25.17**	低群<基礎高群=確立高群<高群
	標準偏差	4.12	3.81	3.34	3.32		
処理可能感	平均値	13.74	14.65	17.03	17.62	17.18**	低群=基礎高群<確立高群=高群
	標準偏差	3.52	3.68	3.06	3.56		
把握可能感	平均値	15.60	16.88	21.13	21.50	27.53**	低群=基礎高群<確立高群=高群
	標準偏差	4.24	4.78	4.15	4.24		
SOC合計	平均値	42.86	48.65	54.68	57.96	40.88**	低群<基礎高群<確立高群=高群
	標準偏差	8.68	9.28	7.73	8.03		

** $p<.01$

有意味感では、基礎高群、確立高群、高群が低群よりも有意に得点が高く、高群が低群、確立高群、基礎高群よりも有意に得点が高かった。処理可能感では、確立高群と高群が低群と基礎高群よりも有意に得点が高かった。把握可能感も同様に確立高群と高群が低群と基礎高群よりも有意に得点が高かった。SOC 合計得点では、低群はすべての群よりも有意に得点が低く、確立高群と高群は低群と基礎高群よりも有意に得点が高かった。このことから、有意味感についてのみ仮説は支持された。しかし、処理可能感と把握可能感では、低群と基礎高群との間に違いがみられなかったこと、基礎高群と確立高群で違いがみられたという点で仮説は支持されなかった。

3. 考察

アイデンティティ尺度と SOC の相関分析から、アイデンティティの基礎とアイデンティティの確立が SOC の 3 要素に示す関連が違うことが分かった。アイデンティティの基礎は、エリクソンの発達早期の基本的信頼や自律性に関わる内容であり、アイデンティティを確立するために基礎となるものである。そのためすでに大学生はその課題を獲得するための時期は通過しているはずであり、発達段階初期でアイデンティティの基礎が確立されている者、あるいはそうでない者との違いが明確で、その状態はすでに安定したものとして個人に定着している程度が高いと考えられる。しかし、アイデンティティの確立については、課題として取り組む時期であり課題の獲得程度には個人差があると考えられ、基礎よりも今後変化していく程度が高いと考えられる。この

ことから、アイデンティティの基礎と SOC のすべての要素とは正の相関がみられたと考える。また、アイデンティティの確立は社会状況におけるアイデンティティを問う内容と関連しているため、自分の社会状況の中で自分の価値や意味を見出すことができている者は、自分が直面している出来事に対して意味を見出す力があると考えられるため関連が認められたと思われる。しかし、処理可能感と把握可能感については、状況を理解する力や状況に対処できそうな感覚であり、何かに意味づけを行うわけではないため、関連が認められなかったと思われる。

次に、アイデンティティの確立状態との関連において、アイデンティティ確立状態が低い人は有意味感が低く、アイデンティティ確立状態の高い人は有意味感が高いという結果は、しっかりしたアイデンティティを持っている人は強い SOC を持っており、逆にしっかりとしたアイデンティティを持っていない人は弱い SOC を持っている¹⁾ということを示す結果であり、アイデンティティの確立が SOC の形成に関連していることが示唆された。しかし、処理可能感と把握可能感で低群と基礎高群の間に差が認められなかった。この点については、後述の理由が考えられる。アイデンティティの形成順序としては、アイデンティティの基礎も確立も低い状態から、最初に基礎が形成された状態である基礎高群へと移行し、最終的に確立が形成された状態である高群へと辿り着く。青年期の課題であるアイデンティティの確立期にある大学生は、アイデンティティの確立程度が低いと考えられる。アイデンティティの確立は社会状況の中のアイデンティティを問う内容であり、アイデンティティの確立された成人期と比較するとまだ低い位置にいるため、社会状況の中にある自分と外界との関係を把握し理解する視点が未熟であるから、状況理解やその状況が何とかなるという力が低かったと考えられる。そのように考えると、SOC の要素を発達順序の視点から見ると、有意味感が形成され、その後に処理可能感と把握可能感が形成されていくと考えてもよいかもしれない。

次に、処理可能感と把握可能感では確立高群と高群には違いは見られなかったが、有意味感が高群の方が確立高群よりも高かったことについて検討していく。アイデンティティの確立高群はアイデンティティの基礎は低いアイデンティティの確立は高いため、今後何かをきっかけにアイデンティティが揺るがされた場合に基礎がしっかりとしていないことからアイデンティティが危機的な状況に陥る可能性が高い。基礎の弱いアイデンティティ、つまり表面的なアイデンティティの確立状態と考えてよいだろう。一方、高群は基礎が築かれたうえで青年期のアイデンティティの確立程度が高いため、今後アイデンティティが揺るがされる体験に直面しても、その後もアイデンティティを再確立していくことができるであろう。アイデンティティの基礎がしっかりとしていないことは弱い自己とも強く関連していると思われる。強い SOC と硬い SOC は区別すべきであり、硬い SOC の基礎には弱い自己があると言われており、この硬い SOC の判断基準は SOC 得点が上位 4 ~ 5 % の人たちであり、この基準だけでは十分ではないとしている¹⁾。本研究では、処理可能感、把握可能感と SOC 合計得点では、確立高群と高群の違いは見られなかった

が、有意味感では違いが見られたため、有意味感得点の高低が硬い SOC と強い SOC の違いを見分ける一つの指標になりうる可能性が示唆された。有意味感は自分にとって良くない状況に対し自分なりの意味を見つけ出すことであり、それは、状況に応じで見方を変えられる柔軟性にも通じられると思われる。そのような柔軟性はしなやかにストレスに対処できる SOC の要だと捉えることができ、有意味感の高低と硬い SOC との関連について今後更に検討していくべき課題である。

Ⅲ. 研究 2 : SOC と信頼感について

1. 方法

a. 調査対象者及び調査手続き

関西私立 A 大学心理学関連講座の男女大学生 119 名を対象とし、授業中に調査用紙を一斉配付し、その場で回収した。対象者のうち、調査協力を同意が得られ回答に不備がなかった 110 名（男 84 名、女性 26 名）を分析対象とした。調査期間は、2017 年 7 月と 10 月である。2 講座の受講生を対象に調査協力を依頼したため、両講座を受講している者で 7 月にすでに回答をした学生については、10 月の講座では回答対象としなかった。

b. 調査用紙

〔信頼感尺度〕天貝が作成した、対自的側面、対他的側面に着目した信頼感を測定する尺度⁵⁾を使用した。本研究では、オリジナルの項目文に若干修正を加えて使用した。修正点については、項目内容が変わらないように項目文の長さを短くし回答者が読みやすいようにした。例えば、「これまでに出会ったほとんどの人は私に良くしてくれた」という項目の前半部分を削除し、「ほとんどの人は私に良くしてくれた」と変更した。また、「私は、自分自身をある程度は信頼できる」を「自分のことを信頼できる」へと変更した。ただし、「私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信を持っている。」の項目についてのみ全体的に修正し「私は、ある程度は自分の行動をコントロールすることができる」へと変更した。

質問紙は、「不信」、「自分への信頼」、「他人への信頼」の 3 因子からなり、それぞれ順に 10 項目、6 項目、8 項目の合計 24 項目から構成されている尺度である。回答方法は、「全く違う（1 点）」から「非常にそうだ（6 点）」の 6 件法である。

〔SOC スケール〕研究 1 で使用したのと同じ尺度を使用し、信頼感尺度と同時に実施した。

2. 結果

以下の統計処理には、IBM SPSS Statistics 22 を使用した。

a. 信頼感尺度の因子分析

項目文に若干の修正を加えたため、因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値は 6.997、2.781、1.463、1.285、1.170、1.105・・・と変化しており、2 因子構造で考えるのが良いと思われたが、本尺度は本来 3 因子構造であったこと、また、今回の分析対象者数が 110 名とそれほど多くはなかったという理由から、これまでの 3 因子構造に従い、3 因子での回転を試みた。その結果は表 3 の通りである。項目 12 と項目 23 については全体的に因子負荷量が低かったため削除した。因子分析の結果は、表 3 の通りである。

元々の 3 因子の項目と比較すると、第 1 因子の「不信」については同じ項目でまとまったが、第 2 因子の「他人への信頼」では、「自分への信頼」の 2 項目（項目番号 14、24）が移動し、第

表 3. 信頼感尺度の因子分析（主因子法，プロマックス回転）

	第1因子 不信	第2因子 他人への信頼	第3因子 自分への信頼	共通性
17 人は私の弱みにつけ込もうとするだろう	.757	.042	-.108	.589
5 心から頼れる人であっても、いつか裏切られるものだ	.748	.212	-.232	.515
13 人は、自分のためなら簡単に相手を裏切るものだ	.709	.158	-.192	.475
22 人を信じるのは怖い	.701	.023	.096	.447
11 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることで相手に利益があるときだ	.651	-.095	.275	.458
15 なんとか話せる相手でも、あてにならないものである	.609	-.020	.114	.358
21 自分で自分をしっかり守らないと、私は壊れてしまうだろう	.525	-.029	.352	.307
19 人に対して疑り(うたぐり)深い	.516	.110	.077	.203
8 周りは敵ばかりだ	.443	-.385	-.014	.557
6 地位や立場が変われば、私は全く違う人間になるだろう	.428	-.022	.106	.179
1 ほとんどの人は私に良くしてくれた	-.129	.762	-.105	.639
4 他人はある程度は信頼できるものだ	-.020	.749	-.159	.484
2 この先の人生でも、信頼できる人と出会えるだろう	-.106	.666	-.030	.518
9 ほとんどの人は私を信頼してくれる	-.059	.645	.103	.545
24 私は、ある程度は自分の行動をコントロールすることができる	.283	.628	.077	.304
3 多少のことがあっても、今ある信頼関係を保っていけるだろう。	-.027	.546	.156	.429
7 私には信頼できる人がいる	-.077	.504	.194	.450
14 私は他人にはとってかわることでできない存在である	.211	.476	-.068	.131
10 今は実現していないことでも、私はいつかこうなるだろうと思えることは多い	.114	-.067	.570	.278
18 私は、信頼に値する人間である	.078	.216	.537	.415
20 人は信頼できるものだ	-.187	.195	.517	.538
16 自分のことを信頼できる	.200	-.006	.453	.194
12 自分の人生、何とかやっつけていけるだろう	.039	.372	.292	.311
23 人は、互いに、正直に、かつ誠実に関わりあいたいと思っている	-.057	.229	.179	.151
	寄与率	27.60%	9.23%	3.71%
	累積寄与率	27.60%	36.83%	40.54%

3 因子の「自分への信頼」では、「他人への信頼」の 1 項目（項目番号 20）の移動が確認された。また、念のため、2 因子での回転も行い、3 因子構造と 2 因子構造での結果を比較した。2 因子構造でも 3 因子構造でも、「不信」因子にまとまった項目は全く同じであった。第 2 因子に負荷した項目は「他人への信頼」と「自分への信頼」の項目であった。ただし、3 つの項目については、両方の因子にまたがって負荷していたり、負荷量が低くなっていた。このことから、2 因子より

も、3 因子で解釈を行うほうがよいと判断した。

b. 信頼感が SOC に与える影響について

信頼感が SOC の 3 要素の形成に与える影響についてみるために、SOC の 3 要素を目的変数として、信頼性尺度の 3 因子の各合計得点を説明変数として重回帰分析（強制投入）を行った。その結果が表 4 から表 6 の通りである。

表 4. 信頼感尺度を説明変数とし有意感感を目的変数とした重回帰分析（強制投入）

	標準偏回帰係数 β	t	有意確率
不信	-0.138	-1.541	0.126
他人への信頼	0.261	2.669	0.009
自分への信頼	0.354	4.046	0.000
R	R ²	調整済み R ²	
0.579	0.336	0.317	

表 5. 信頼感尺度を説明変数とし処理可能感を目的変数とした重回帰分析（強制投入）

	標準偏回帰係数 β	t	有意確率
不信	-0.425	-4.389	0.000
他人への信頼	-0.021	-0.196	0.845
自分への信頼	0.181	1.912	0.059
R	R ²	調整済み R ²	
0.472	0.223	0.201	

表 6. 信頼感尺度を説明変数とし把握可能感を目的変数とした重回帰分析（強制投入）

	標準偏回帰係数 β	t	有意確率
不信	-0.322	-3.203	0.002
他人への信頼	0.139	1.267	0.208
自分への信頼	-0.022	-0.225	0.822
R	R ²	調整済み R ²	
0.401	0.160	0.137	

有意味感を目的変数とした場合、信頼感の3つの因子で33.6%の分散を説明することができ、「自分への信頼 ($\beta=0.354$)」と「他人への信頼 ($\beta=0.261$)」の順で影響を与えていることが分かった。処理可能感を目的変数とした場合、信頼感の3つの因子で22.3%の分散を説明することができ、「不信 ($\beta=-0.425$)」のみが有意な影響を与えていることが分かった。「自分への信頼 ($\beta=0.181$)」については有意な傾向にとどまった。把握可能感を目的変数とした場合、信頼感の3つの因子で16%の分散を説明することができ、「不信 ($\beta=-0.332$)」のみが有意な影響を与えていることが分かった。つまり、自分への信頼感と他人への信頼感が有意味感を高め、不信の低さが処理可能感と把握可能感を高めることが分かった。ここでも研究1と同様、有意味感は処理可能感と把握可能感と違う関連を示した。有意味感においてのみ仮説は支持されたが、処理可能感と把握可能感では不信との負の有意な関連のみが認められたため仮説は支持されなかった。

3. 考察

自分への信頼、他人への信頼の両方の影響を受けていたのは有意味感のみであった。自分が直面する苦痛な出来事であっても自分や外界への信頼があれば、それは被害的な意味づけにはなにくく、自分を脅かすものではない良い方向に意味づけし理解していく土壌が作られると考えられる。そのため、自分への信頼と他人への信頼が有意味感を高める要因として影響を与えたと考える。

しかし、処理可能感と把握可能感には自分と他人への信頼の影響は認められず、不信の低さが影響として認められた。処理可能感は困難な状況でも何とかやれるという感覚が生じる側面であり、把握可能感は直面している状況や問題が自分にとって何だかわかるという感覚が生じる側面である。その感覚を形成するには、信頼することよりも、不信感が低く、うたがう気持ちがないことが、周囲への状況を理解し、対処できそうな感覚を高めるのかもしれない。例えば、何か困難な問題に直面した時に、他人を信じられない感覚があるとすれば、その感覚は、その困難な状況への対処に際して、「誰も力になってくれないかもしれない」と感じたり、不信な気持ちが強ければ「誰かが邪魔をするかもしれない」などと被害感や不安感を高めることになり、対処できる感覚は低くなるだろう。また、自分の周囲で起こっていることに対して受け入れやすい形でわかる感覚の妨げにもなるかもしれない。このように考えていくと処理可能感と把握可能感を高めるために不信は妨げ要因として関連する。このことから、SOCの妨害要因の一つとして不信が示唆されたが、SOCの形成にどのように関連しているかについて更に検討することが必要と考える。

IV. まとめ

これまでの研究からSOCと様々な要因との関連は処理可能感と把握可能感では同様の関連を示すが、有意味感はこの2要素とは違った関連を示すことが分かっている^{6)~8)}。しかし、本研究

は、アイデンティティと信頼感を取り上げ、SOC に与える影響について検討するにあたり、両要因は信頼感という点で共通しており、SCO を形成するためのベース要因の重要な一つとして考えているため、SOC の 3 要素は同じ関連を示すという予測の下で行われた。結果としては、これまでの研究結果と同様の有意味感処理可能感、把握可能感と違う関連が認められることとなった。しかしながら、今後の研究を展開していくきっかけとなる結果だと考えられる。

まず、アイデンティティの確立状態との関連から、アイデンティティの基礎が低くアイデンティティの確立が高い表面的なアイデンティティ確立状態にある人たちは、弱い自己を基礎に持っている硬い SOC を形成する可能性が示唆されたことである。そして、SOC の 3 要素の形成順として有意味感の形成後に処理可能感や把握可能感が形成される可能性が示唆された。また、自分や他人への信頼感是有意味感の形成促進要因となり、不信感処理可能感と把握可能感の形成の妨げ要因になりうることである。以上の 3 点については今後検討すべき課題である。

引用文献

- 1) Antonovsky A (山崎喜比古・吉井清子 監訳)：『健康の謎を解く：ストレス対処と健康保持のメカニズム』(有信堂, 2001)
- 2) 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子 編：『ストレス対処能力 SOC』(有信堂,2008)
- 3) Erikson,E.H. (西平 直・中島由恵訳)：『アイデンティティとライフサイクル』(誠信書房, 2011)
- 4) 下山晴彦:「大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—」,『教育心理学研究』40 (1992) 121-129.
- 5) 天貝由美子:「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」,『教育心理学研究』43,No.4 (1995) 364-371.
- 6) 銅直優子:「大学生の Sense of Coherence (首尾一貫感覚, SOC) と性格特性との関連について」,『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』19,No.3 (2007) 133-143.
- 7) 銅直優子:「Sense of Coherence (首尾一貫感覚) ストレス状況下における反応スタイルの関係について」,『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』22,No.2 (2010) 125-131.
- 8) 銅直優子:「大学生の友人関係態度と首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) が日常いざだちに与える影響について」,『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』28,No.1 (2015) 85-93.

付記：本論文の研究の一部は日本心理学会第 81 回大会で発表したものである。